



日本研究・知的交流

Japanese Studies and Intellectual Exchange

日本研究・知的交流

Japanese Studies and
Intellectual Exchange

海外での日本研究を支援すること、そして海外の社会や文化への理解を日本の中で広げていくことは、相互理解を深め、心をひとつにして共通の課題の解決に向かっていくことにつながります。国際交流基金は深い日本理解と人的ネットワークの形成を促進するため、海外の日本研究者を支援し、また国際的に著名な学者を日本に招くなど、学術や研究を通じて国際交流を積極的に推し進めています。

海外での日本研究の促進

海外で行われる日本研究は、日本人や日本社会への理解を深めるだけでなく、それぞれの国と日本との良好な関係を維持させるものです。国際交流基金では、日本の社会、文化、芸術、歴史などさまざまな分野を担う海外の研究者を支援しています。多くの日本研究者は、大学や研究機関に籍を置きながら研究活動を続けていますが、そのためには研究機関による安定的なサポートや、研究活動を継続できる環境を構築することが重要です。そこで国際交流基金は、その国や地域において日本研究を担う中核的な機関に支援するとともに、研究者が日本で研究する際にフェロースhipを供与するなど、世界で幅広く日本研究が行われるようプログラムを展開しています。また、研究者同士を結びつける機会を積極的に提供し、各研究者の間で交流が活性化されるよう活動しています。

知的交流の促進

世界や地域に共通する課題への理解を深め、その解決に向けてさまざまな分野の知的リーダーが国境を越えて取り組むため、ワークショップや国際会議などを開催し、国際的な対話や研究を促進しています。また、日本に対する知的な関心を喚起するために、さまざまな分野の有識者、専門家に訪日機会を提供しています。そして、同様の課題を扱う多様な担い手が企画、実施する知的交流事業を助成・支援します。こうした知的交流の推進を通じ、多層的、多角的な国際相互理解を推進することで、世界の発展と安定に向けた知的貢献をめざします。

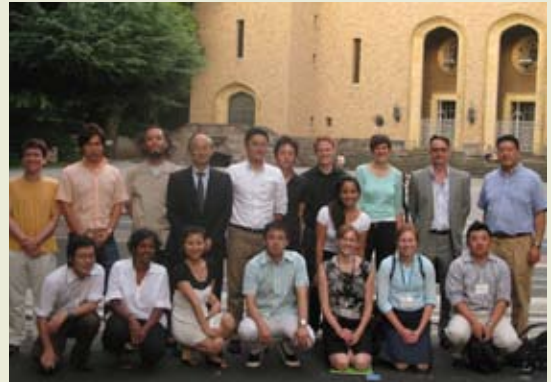
日米センター事業

日米センター (Center for Global Partnership) は、日本と米国の人々が世界中の人々とともに、グローバルな課題、アジア・太平洋地域に共通する課題に取り組み、各界各層において対話し、交流するための共同プロジェクトを実施しています。国際会議、セミナー、ワークショップ、調査などを自ら実施するとともに、国際秩序の形成に向けた対話促進活動や、グローバル化が地域社会に及ぼす影響を克服するための連携活動など、同じ課題に取り組む他団体の活動への助成を行なっています。また、フェロースhip供与やコーディネーターの派遣を通じて、研究の進展と国際的な課題解決を担う人材の育成に努めています。

日本研究・知的交流事業では、
左記のコンセプトに基づき、
右の3つの方法で研究支援や
交流の促進を行っています。

1 機関支援

日本研究の分野において、各国で中核的な役割を担う大学や日本研究センターなどの機関に対し、日本研究の基盤を強化し、人材を育成するため、中期、長期的な計画に基づいて支援をしています。研究や国際会議への支援のみならず、各機関のニーズに応じて教員拡充のための支援、客員教授の派遣、図書拡充のための支援などを行っています。こうした包括的・継続的な支援により、世界中の日本研究機関の活動がより活性化するように、事業を展開しています。



2 ネットワーク強化

研究者間の緊密なネットワークを強化するため、国際会議やワークショップなど、対話を促進する場を企画しています。日本研究では、特に分野を越えた専門家同士の連携を促進するため、日本研究の国際会議を支援しています。また、ネットワーク強化を目的とした自主的な活動に対し助成を行います。海外の知日層との関係強化のための学会や、日本に留学経験のある日本研究者同士のネットワークづくり、国際会議の開催経費等、活動の一部を助成することでネットワークの多様化を推進しています。



3 フェロークシッ

日本研究や知的交流の分野で優れた活動をする個人に対して助成を行います。日本研究の分野では、海外の研究者、博士論文執筆者、短期滞在研究者に対しフェロークシッを供与しています。知的交流の分野では、海外の有識者・専門家に対し訪日機会を提供しています。また、日米のグローバルなパートナーシッを強化する観点から、研究者・ジャーナリストの研究・交流活動を支援する安倍フェロークシッを実施しています。



日本研究のグローバル化に向けての提言

国際社会における日本への関心が、中国・インドをはじめとしたアジア地域全般の関心へとシフトするなか、海外での日本研究をめぐる現状の把握と課題の整理、日本研究への国内での理解促進や、国・地域を越えた研究者間ネットワークの構築が必要となっています。国際交流基金では、日本研究のグローバル化をいかに推進できるかという課題に対し、「世界日本研究者フォーラム」の開催を通じ、世界での日本研究の現状把握と、今後の展望や課題を明らかにする取り組みを行いました。

可能な限り多くの国・地域の日本研究の現状を把握すべく、日本研究の中核を担う10カ国16名の日本研究者に参加を仰ぎ、2009年10月13日から2日間、箱根でのフォーラムを、続いて10月15日には国際交流基金本部で公開シンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、「各国・地域における日本研究の現況」「地域研究と日本研究」「アジア研究と日本研究」「日本語と日本研究」の4点で現状報告と課題が議論され、以下のような視点が発表者から提示されました。

徐一平教授 [北京日本学研究中心]

「政治と経済は車の二輪と言われるが、二輪型の車は、迅速に発展できない『人力車』型か、不安定で倒れやすい『自転車』型しか考えられない。文化理解があってはじめて安定して早く走る『三輪車』型の交流ができる。『三輪車』型の交流は持続可能な交流であり、文化の理解は、政治、経済の理解を深めていく方向づけ(舵取り)のある交流だ」。

ハラルド・フース教授 [ヨーロッパ日本研究協会会長]

「ヨーロッパ日本研究協会は3年に一度、約600名の研究者を集めて総会を開いている。オリンピックのように4年に一度、日本研究者の世界総会を日本で開くことができないだろうか。また、共同研究の礎となる個人研究の支援が大事であり、特に若手研究者への支援は、人材育成のための投資である」。

パトリシア・スタインホフ教授 [ハワイ大学]

「米国における日本研究は、この10年間に内的な変化があり、かつ社会的グローバル化にともなう大きな変化があった。たとえば、戦後世代の日本研究者が引退し、研究者の世代交代が進んでいる。若い研究者は日本語能力が高く、日本語の原文資料を読み、ダイレクトな研究をしている研究者が増えた」。

参加者からは、「普段接することのない分野・地域の日本研究者と議論することができて良い刺激になった」「今回明らかになった課題を次に繋げていきたい」といった声が寄せられました。このイベントの後に参加者のひとりが企画・立案をして、今回のフォーラムで出会った参加者による会議が北京で開かれるなど、実際にネットワークの強化がなされた例も報告されています。

[世界日本研究者フォーラム2009、神奈川・箱根町、東京、2009年10月13日～15日]



国際交流基金本部での公開シンポジウム

東南アジアの若手知的リーダーとの ネットワーク形成

東南アジア諸国は地理的に日本との関係が深い国々であり、また、これらの地域は、現在目覚ましい発展を遂げています。今後、日本はこれらの地域の国々と、政治・経済面のみならず、さまざまな点で理解を深め、友好的な関係を築くことが重要と考えられています。今回のプログラムは、東南アジア地域の次世代のイスラム若手研究者を日本に招へいし、日本理解の促進と研究者間のネットワーク形成を目的としたもので、2009年11月に10日間にわたって実施されました。

プログラムに参加したのは以下の3カ国から来日した計7名の若手研究者たちです。

■インドネシア 氏名の後の()内は専攻分野(敬称略)

エウイス・ヌラエワティ(イスラム家族法)

エヴァ・ヌグラハ(コーラン史、大学マネジメント)

バンバン・スルヤディ(教育、カウンセリング心理学)

スクロン・カミル(アラブ文学、イスラムと社会政治)

イフサン・イブラヒム(宗教・国際関係)

以上5は国立イスラム大学ジャカルタ校の講師および職員

■フィリピン

ハニ・A・ブッド[ミンダナオ州立大学](国際関係論、機構マネジメント、アラビアおよびイスラム研究)

■マレーシア

ユスリ・モハマド[国際イスラーム大学](イスラム法、マレーシア憲法、マレーシアにおけるイスラム)

プログラムの主たるテーマとなった日本の近代化の出発点となる明治維新を軸に、政治、経済、技術、宗教、文化に関する講義、お茶席の体験や寺社仏閣への訪問、広島への「原爆ドーム」および「平和記念資料館」、神戸の「人と未来防災センター」「神戸モスク」などの視察を行いながら、日本に対する理解を深めました。

参加者からは、講義のテーマである「日本の近代化」が非西洋世界に属する自国の近代化を考える上で示唆に富むものであったことや、茶道体験等によって、日本人の生活文化を学ぶことができたとの感想が聞かれました。また、広島への訪問は平和の重要性について改めて考える契機となったといった声が多くありました。

このプログラムに続き、2010年3月にはフォローアップ事業として、本事業参加者と日本からの派遣講師として南山大学外国語学部の小林寧子教授が、ジャカルタに再び参集し、「近代化とイスラーム」と題するパネルディスカッションが行われました。会場は国立イスラム大学ジャカルタ校。「インドネシアでのイスラム」を専門とする小林教授の基調講演に続き、今回の招へいプログラム参加の7名のメンバーそれぞれ研究発表を行い、その後、パネルディスカッションへと続けました。日本で経験を得た上での発表や討論に、聴衆として集まった同地の大学生や大学院生、研究者から賞賛の声が多く寄せられました。

[東南アジア若手イスラム知識人招へい、東京、京都、兵庫、広島、2009年11月4日～13日]



[上] お茶席の体験で

[左] 広島平和記念公園で折りを捧げる

研究者間のネットワークが 新たな研究への道を拓く

2009年9月11日から12日にかけて、アルザス・ヨーロッパ日本学研究所 (Centre Européen d'Études Japonaises d'Alsace 略称: CEEJA) において、日本研究セミナー「明治」が開催されました。アルザス地方はフランスのなかでもドイツとの国境に接し、三方をブドウ畑に囲まれ、アルザスの山並みを彼方に仰ぐ風光明媚な地です。元成城学園アルザス校の学生寮を改装したCEEJAにおいて、参加者は寝食を共にしつつ、活発な議論を行いました。

本研究セミナーは、日本研究に関する広域的なテーマを設定して、そのテーマに関連するヨーロッパの若手研究者を一同に集め、日本から派遣された講師の下、相互の発表を聞き、意見と議論が交わされます。各人の研究を広げつつ深めるとともに、隣接領域を横断するようなヨーロッパにおける若手研究者のネットワークを形成することを目的としています。一昨年、昨年のテーマ「江戸」に引き続き、本年は「明治」がテーマとなりました。講師は、明治から現代にかけての日本政治史が専門で、『明治国家をつくる』などの著書のある御厨^{みくりや}貴^{たかし}教授 (東京大学)。そして、ヨーロッパ各地から9名の欧州出身の研究者と、欧州の研究機関に籍を置く日本出身の研究者が明治期に関わるそれぞれの研究成果を日本語で発表した後、意見交換を行いました。発表者と研究テーマは以下のように幅広いものでした。(敬称略)

高世信晃 [ロンドン大学 SOAS 博士課程 (英国)]

「陸奥宗光の描く明治国家像－陸奥のヨーロッパ政治制度研究と日本への導入について」

マッティン・ノーデボリ [ヨーテボリ大学助教授 (スウェーデン)]

「西洋化に対抗する－明治初期にアメリカの教科書が小学読本へ」

山梨淳 [社会科学高等研究院博士課程 (フランス)]

「20世紀初頭における転換期の日本カトリック教会－日本人カトリック者とフランス人宣教師との関係を中心に」

レスチャン・アニタ [ELTE大学博士課程 (ハンガリー)]

「明治維新における神仏分離」

太田知美 [東アジア文化研究センター研究員、ストラスブール大学講師 (フランス)]

「明治期荷風テキストにおける家族表象－虚構の日本の家族像、理想的な西洋家族像」

フレデリック・エブラール [上アルザス大学博士課程 (フランス)]

「日刊新聞草創期の連載小説をめぐって」

シルヴァーナ・デ・マイオ [ナポリ大学「オリエンターレ」専任講師 (イタリア)]

「明治初期の日本における伊太利亜王国海軍の艦隊」

阿久津マリ子 [リヨン第3大学博士課程 (フランス)]

「ヨーロッパ影響下における19世紀後半の伊万里焼生産の近代化」

オリガ・マカロバ [ロシア国立人文科学大学博士課程 (ロシア)]

「明治日本における『ナショナル美術』の概念」

講師の御厨教授は「9つの発表は、全体として幅広いテーマながら、いずれも想像していた以上に生産性豊かなものだった。母国語でない日本語で発表された方の苦労は想像に難くない。また日本人の方を含めて、日本ではなくヨーロッパで研究しているからこそ見えてくる視点で研究されていた。他方で研究者個々人は割と孤立しているとも聞いた。このセミナーを一層の研究を深める、いわばスプリングボードにしつつ、またネットワークを広げる端緒にしてもらいたい」と講評を寄せてくださいました。

国際交流基金は今後も研究者間の幅広いネットワークづくりのために活動を展開していきます。本セミナーの報告書も今後刊行する予定です。

[アルザス日欧知的交流事業・日本研究セミナー「明治」 フランス・CEEJA、2009年9月11日～12日]



CEEJA でのセミナーの様

将来の米国メディア内の 親日感の醸成を図って

日本と米国のより密接な連携を促進するためのプログラムを展開する日米センターでは、2009年8月、「米国ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラム」を実施しました。本プログラムは2009年度の米国のエマーソン・カレッジ（ボストン）に対する助成事業として、将来、ジャーナリストとして活躍が期待されるジャーナリズム専攻の大学院生をグループで日本に招へいするもので、6名の参加者は10日間にわたり、東京・兵庫・京都を訪問しました。東京では、日本の大学院生との交流・対話、メディア関係者・研究者・財界人などとの懇談、兵庫では、阪神淡路大震災の被災者との対話や姫路城の見学、また京都では神社仏閣などの視察を行いました。本事業を通して、参加者が実際の日本社会に触れるとともに、日本の外交や社会政策などの文化的・歴史的背景も理解することが狙いです。

滞日中、日本という異文化のなかで、さまざまな分野の人々と出会ったジャーナリスト候補生は、この経験を通して日本の精神のみならず、ジャーナリストとしてのあり方や今後についてインスピレーションを得たようでした。参加者のひと

り、サンドラ・ガルシアさんは「初めて会った私達に、亡くした家族のことなどを懸命に伝えてくれた阪神淡路大震災被災者のお話は、ジャーナリストを志した原点を思い出させてくれた」と、コメントを寄せてくれました。他の参加者からも「本プログラムをきっかけとして、今後、何らかの形で日本と関わっていきたい」「帰国後も、日本で出会った方々との繋がりを大切にしたい」「以前は、日本についてあまり知らなかったが、このプログラムで日本を身近に感じるようになった」などの感想が寄せられ、参加者の日本に対する関心を喚起することができました。

本プログラムの企画について、日本のマスコミ関係者や講師として参加した方などから、「米国メディアのバランスの取れた報道（政治、経済、社会、文化において）を向上させるうえで、将来、活躍が期待されるジュニアに対して日本理解の機会を提供することの意義は大きい」と、今後への期待の声も上がりました。

[米国ジャーナリズム専攻大学院生招へいプログラム 東京、神奈川、兵庫、京都、2009年8月16日～25日]



[上] NHK国際放送局のスタジオを見学する

[右上] 出発前のオリエンテーション（米国ニューヨークにて）

[右下] 外務省を訪ねて

